

# 横浜詩人会通信

2016.1.1 → No.297

横浜詩人会事務局 横浜市西区境之谷 30-19 油本方 TEL045-516-3182  
発行人 中上哲夫(会長) 東京都町田市金森東 4-35-17 \*郵便振替 00230-0-5574 ヨコハマシジンカイ

## 新年に思う

中上哲夫

新年、あけましておめでとう  
ございます。

いつも詩人会にご理解とご協  
力をいただき、ありがとうございます。

一年の計は元旦にありなんて  
申して、元旦に計画をたてて事  
にあたるべきだという考えがあ  
るけれど、ことはやめた。い  
つも失敗に終わるので。でもも  
しひとつだけたてるとしたら、  
ちゃんと歯を磨くことにしよう。  
暮れに歯医者さんからきつくい  
われたのだ。きちんと歯を磨く  
ようにと。七十歳を越えて情け  
ない話だ。みなさん、歯はちゃ  
んと磨いていますか。

### 閑話休題

実は、去年引越した。数えて  
みると、生まれてから十七回目  
だった。多いのか少ないのかに  
わかに判断できないけど、北斎  
には遠く及ばない。

北斎は、生涯、九十三回転居  
したという。とにかく片付ける

ということをしらない人で、部屋  
が汚くなると引つ越したそう  
だ。一日三回というのもある。

一説には、借金取りに追われて  
いたからだ。九十三回で驚い  
ていたら、明治の浮世絵師の豊  
原周周という人は北斎に対抗し  
て百十一回住いを移したそう。  
「東京人の引つ越し好き」とい  
うらしい。やれやれ。

転居だけでなく、北斎は生涯  
三十回以上改号したというから  
あきれれる。なかには暮らして困  
窮して弟子に売りつけたとい  
うのもあった(らしい)。

えらいなあと思うのは、六十  
歳で描いた「富獄三十六景」が  
大当たりして、押しも押されも  
せぬ売れっ子浮世絵師となった  
にもかかわらず、それに満足す  
ることはなかった。あんなもの  
は屁みたいなものと。

つねに前進してやまないの  
が天才の天才たる所以だと  
思う。ピカソもマイルス・デ  
ヴィスも。八十歳のとき、少  
し絵がわかってきた気がする  
と言った北斎だけど、嘉永二

年(一八四九)、九十歳のとき、  
死に臨んでこう言ったという。

「天、我をして十年の命を長ら  
わしめば」と言い、大きく息を  
吸ってからさらに「天、我をし  
て五年の命を保たしめば、真正  
の画工となるを得べし」と。

長生きするのも才能だなんて  
いうけど、九十二歳まで生きたピ  
カソや九十歳まで生きた北斎を  
見ていると、なるほどどうなづけ  
るね(マイルス・デヴィスだけは  
六十代で死んだけれども)。長命  
にくわえて、もうひとつ天才とい  
われる人たちの特徴は、つぎつぎ  
とスタイルを変えることだ。一カ  
所にとどまっていなくて、つねに  
それを越えようと努めるのだろう。  
わたしがいいたいのは、かれらの  
ような才能に恵まれていないわれ  
らは、無理をしないで、ほどほ  
どに運動し、持病があればそれ  
を手懐けながらせめて長生きし  
ようではないかということ。

今年一年どうぞよろしくお願  
いします。皆さんにとって実り  
ある年であることを祈ってやみ  
ません。二月にお会いしましょう。

◎第47回横浜詩人会賞授賞式開催  
草野理恵子詩集『パリンプセスト』(土曜美術社出版販売)



中上会長と草野氏

第47回横浜詩人会賞授賞式が10月11日(日)午後1時半から馬車道十番館において開催された。受賞作は草野理恵子氏詩集『パリンプセスト』(土曜美術社出版販売)に決定された。1部授賞式の開会の辞は、油本達夫理事長が執り行った。中上哲夫会長は挨拶として、「本日は草野さん授賞おめでとうございます。横浜詩人会は詩人の親睦、現代詩の普及としてイベントを主催しています。また新しい才能の発掘のため、横

浜詩人会賞を催しています。今回は素晴らしい才能の草野さんを発掘しました。現代詩は読まなくなってきたりしている厳しい状況ですが、草野さんに新しい打開するような詩を書いてほしいと思います」と述べた。渡辺みえこ選考委員長から詳しい選考結果の報告がなされた。草野詩集に関しては、「溜めてきた強い言葉が感じられ新鮮でした。今後の課題としては絵の隠された物が何か、像が結びにくく絵をはがした次の世界が見えにくい、閉じられた世界でも読者に像が結ばれるように、納得させられるように表現を構築してほしい。また絵画作品は二次的になりやすいので、今後の課題にしてほしい、という希望がありました。全員一致の良いい詩集でした。おめでとうございます」と述べた。受賞者紹介では、一色真理氏が「草野さんとは何年前前から

詩と思想研究会で知り合いました。研究会に来られる前から、雑誌の投稿欄で活躍をしていました。子どものころ、家が水族館でそれ自体が異界ですが、そこから見ていたことが原体験になり、自分で作った歌を書いてきたことが詩の始まりだった。そういう意味でも詩も性格も天然という印象でした。病気の子どもにも新薬が効くようになり、詩をたくさん書くことができるようになりました。「パリンプセプト」とは西洋の塗り重ねられていく絵のことで、表面をはがすと別の絵があります。この世界の現実を見ていると、その下に根本的な、本質的な別の何かがあり、二重の象徴性があります。悪夢のような美しい世界汚いものほど、美しく輝くべきという逆説性が草野さんの世界なのではないかと思います」と述べた。次に、中上会長から表彰状が、神奈川新聞社丸山孝文化部長から賞金が授与された。

その後、受賞者の草野理恵子氏から挨拶があった。「この度はこのような名誉ある賞をいただき、本当にありがとうございます。会に入っていないのに選んでいただき、感謝しています。私には知的障害の息子がいますが、3ヶ月目に手術をして、その後でんかんの発作が始まりました。心臓発作を伴う重篤なものでした。そのため詩を書くことができなくなりました。わたしは切望しました、詩を書くことができる日が来ますようにと。数年前から、新薬のお陰で劇的に症状が改善され、切望していた詩を書くことができるといふ僥倖が与えられ、その上に賞を得られたことに、感謝しても感謝しきれない思いです。高木社長様、一色先生、横浜詩人会の皆様へ感謝しています」とその思いを語った。横浜詩人会から荻悦子さん、版元の土曜美術社出版販売から高木社長から花束贈呈がされた。神奈川近代文学館の辻原登館長の祝辞を油本理事長が代読した。このように式は無事終了した。

2部ペドロ・エンリケス氏の講演と朗読の会

来日したスペインの著名な詩人ペドロ・エンリケス氏の講演と朗読会が、1部授賞式のとに同じ会場にて行われた。日本詩人クラブの理事であり、横浜詩人会会員でもある細野豊氏から挨拶があり、ペドロ氏の紹介がなされた。

ペドロ氏は1956年生まれ、現在59歳の詩人、作家、編集者、グラナダアカデミー会員で、作品は15冊が出版され、各国で訳されている。

細野氏の通訳・翻訳により、ペドロ氏の講演と朗読が行われた。概要は以下の通りだった。

\* 詩人ペドロ・エンリケス講演「スペイン現代詩ーペリン・ベヨとフェデリコ・ガルシア・ロルカ」

ペドロ氏が述べた内容を細野氏が翻訳する形で講演が始まる。「ありがとう」、これは初めて知った日本語です。アルゼン

チンのブエノスアイレスで一人の日本人(細野氏)、一人のスペイン人(ペドロ氏)、一つの大陸が出会った。それ以後、スカイプなどで友情を深めていきました。その成果が本となりました。これからも一緒に仕事をしたい、日本とスペインとの絆が益々緊密になるように努力します。これからスペインの現代詩についての話をしていきます。

いかなる詩も3つの要素から成り立ちます。一つは、文学的要素。意味。一つは、絵画的要素。イメージ。一つは、音楽的要素。リズム。それでは、スペイン近現代詩について、要領良くまとめたい文章を読ませていただきます。

ペリン・ベヨの愛称で知られているホセ・ベヨ(1904-2008)は、27年世代の最も称賛すべき、忘れがたい創作者です。特に、学生寮においてガルシア・ロルカ、ルイス・ブニエール、サルバドール・ダリと彼自身が形成したグループの主要な人物でした。わたしは彼

が103歳だったときにマドリッドで出会いました。上品で冷静かつ陽気で、記憶力が確かで、最後の日々まで輝いていたホセ・ベヨは、前世紀における最も優れたスペイン現代詩の証人でした。その後スペインの98年世代について語った。内容のあらましはこのようだった。

「1898年にスペインは米西戦争で軍事的敗北をし、道徳的、政治的、社会的危機を迎えた。その時期、控えめな文体とスペインの現実を反映した文学が重視されました。14年世代では、特徴として堅固な知的形成と問題定義の体系化であり、都市と都会的価値観に戻った。またヨーロッパ文化への傾倒がありました。」

27年世代は、20世紀の最も重要な頁を書き残した。差異と個性があり、詩人一人ひとりが独特でありました。また優れた雑誌と関わりを持つようになり「この時期に最も代表的な人物

のロルカについて、ベヨは、「ガルシア・ロルカとわたしは、とても深い友情で結ばれていました。彼は別世界の存在でした。彼の優雅さは言葉では言い表せません。周囲を巻き込む大笑い。陽気で、外交的でした」と話した。そうである。

それ以後の50年世代、60年世代、70年世代、80年世代、90年世代のそれぞれの特徴と違いについて話をした。2015年現在では、「最新の詩は、「実験の詩」であろうが「差異の詩」であろうが関係ないところから出発し、多様な領域の中を動いています」と述べた。

またペリン・ベヨとガルシア・ロルカの回想に戻り、ホセ・ベヨに捧げられたガルシア・ロルカの詩「聖金曜日夕暮れ」が朗読された。

講演の後には、ペドロ氏の数編の詩の朗読が行われた。最後に朗読された「死の際にはバルコニーの窓を開けておいてほしい」という「モンテビデオの光」は特に印象に残った。



「モンテビデオの最初の光が閉じられた窓の中のカーテンをガラスの留め金を見通す。バルコニーを開けておいてくれ」  
臨終の際の光や空気のイメージが鮮明に伝わる詩だった。

(翻訳・通訳・資料提供・細野豊)



ペドロ氏と細野氏

### 3部・懇親会の模様

2部のペドロ氏の講演・朗読会が終了し、部屋を移し3時から懇親会が開催された。

荒船理事、西村理事の司会でごやかに進行されていた。

神奈川新聞文化部長の丸山氏の挨拶が行われた。

乾杯の音頭は禿氏が行い、

「横浜詩人会賞(受賞者)は横浜から出られても他所でも活躍できます。ぜひ草野さんにも会に入ってもらいたい。またペドロさん、お越しいただき、よろこ」と述べた。

会員・参加者による歓談が行われ、各選考委員が選考・お祝いの言葉を順に話した。

今泉選考委員、木島選考委員、徳弘選考委員、光富選考委員、荒船選考委員らが述べた。

そのうち荒船選考委員は「この作品にはわかりにくい部分があります。現代詩は読まれなくなってきたりしますが、名作はわかりやすいものもあります。草野さんにはぜひ未来を切り開いてほしい」と話した。

受賞者の友人の青木由弥子氏は「草野さんとは詩と思想研究会で出会いました。よく笑うひとで、人が気づかないところに気づく、やさしさがあります」と紹介した。

岡島弘子氏は「草野さんの詩集を夫の一色真理編集長から借りて読みました。今後いろいろな世界で活躍してほしいです」と述べた。

高木社長は草野氏の受賞の感謝を述べ「後書きの言葉に感動しています。三人の子どもを育てる草野さんの若さには適いません。詩を書くことをやめないで続けてほしいです。またペドロさんに会えて光栄です」と述べた。

その後出席者のショートスピーチが続き、5時に無事終了となった。2次会は「日本海庄や」で行われた。

草野氏の新たな詩が書かれることを楽しみにしたい。

【参加者】(敬称略)  
受賞者・草野理恵子  
来賓・丸山孝(神奈川新聞社)  
一色真理 高木祐子  
岡島弘子 青木由弥子  
講演者・ペドロ・エンリエス  
細野豊(通訳)  
油本達夫 荒船健次 池田高明

これはニュースとしても、日本未来派に書かねばと思っていたら、数年振りに本会報の原稿依頼。そこに、「小野十三郎」賞の知らせ。

まず、名誉会員から書くと、伊藤桂一・大岡信・新川和江さん・長谷川龍生など十名ほど。山田今次・高橋新吉・伊藤信吉・長島三芳など個人もせいぜい三十名程度。

(僕がお逢いしたことのある詩人の中から)  
で、日本未来派の宣伝をかねて、書きますと、長島三芳は第二回目の日氏賞受賞者で、ご逝去後、いつかは国宝級になるような賞のケースを、神奈川近代文学館に遺贈された。日本未来派刊行の詩集『黒い果実』での受賞である。

さて、小野十三郎であるが、またなくなつて数年。生まれも育ちも大阪であるが、教科書にも詩が採りあげられていたので知っている人も多い。二十歳で「赤と黒」の同人。仲間にはほとんどが、アナキスト。その中

には若き日の林芙美子などもいたのである。  
昭和二十一年に、日本未来派の同人になったというから、創刊と同時に知れない。一号から百五十号くらいまでは、よく発表していたが、六十周年号には氏名はない。

さて2005年度に、「現代詩人賞」第二十三回の平林敏彦授賞式があり、僕もお祝いに駆け付けた。会長安藤元雄・副理事長が、山田隆昭さんの時で、なぜか山田さんに「平林敏彦」は、旧知の中であるような、自慢をした気がする。考えてみると十七歳のころ、扇谷義男さんから、「人見勇」を紹介され、彼を訪ねたときは、病床で、間もなく亡くなったそう。平林敏彦さんは、一度も会っていないが、姿の見えない氏については存在を知る由もなかった。

横浜に戻ってきた頃の平林さんは、事務局長の禿さんいわく「平林さんが会長だと、事業が次から次とあるので、忙しくつ

て……」と、嬉しい悲鳴をあげるほど、横浜詩人会としても、多くの業績を残してくれている。僕も、上をみたら、亡くなった手塚久子・寛慎二・年齢の近い人もいない。もちろん、近藤東・山田今次・みんな過去の人になつている。それでも、横浜詩人会の会合にできれば、同年代か、少し下の年代はまだ健在だから、もうちょっと書いていたい。「植木君、詩人というからは詩をかい、同人誌で仲間と研鑽しなければだめだよ」扇谷義男さん。「詩人は、生きて書いている間は、詩人という身分証明書を貰っているようなものだよ」長島三芳さん。

僕にくれた二人の詩人の言葉である。  
足元にもおよばないが、いま、行動と詩作品で僕に大きなものを示してくれているのが、元気な平林敏彦氏。次はどんなことで喜びを与えてくれるか、いつまでも元気で、若くいて欲しい。(この原稿は、改訂して日本未来派誌上に次号掲載予定)



パーティ会場

受賞者の草野氏

伊藤悠子 今泉協子 うめだけんさく  
荻悦子 方喰あい子 禿慶子  
川端進 木島章 小林妙子  
進藤友佳 菅野真砂 関中子  
鎮西貴信 徳弘康代 中上哲夫  
西村富枝 原田もも代 日野零  
細野豊 細野令夫人 光富郁登  
小桜ゆみ 山田玲子 渡辺みえこ  
(会場・馬車道十番館/記事・光富郁登  
写真・光富郁登、小桜ゆみ)

讀題話(当て字)

### 平林敏彦さんと小野十三郎賞と日本未来派

植木肖太郎

いつもそうだ。福田正夫詩の会で、ジャズと詩の朗読会を開いた。横浜詩人会でもやりたいなど、會長の平林さんに相談、直ちにその年の「夏の夕べジャズと詩の朗読会」戦後初めての会が開かれた。今年の夏、ドルフィの入り口にその時の写真を飾った。

いつもそうだというのは、最近、「日本未来派」の詩以外の原稿を依頼されるたびに「平林敏彦」の何かしらの、記録しなければという何かが起きる。

日本現代詩人会のもそうである。「植木さんは総会会員ね」と、すごい昔に、手塚久子(横浜詩人会会員・山脈会員)に揶揄されたが、当時日本現代詩人会などは、先達詩人がごろごろ、若い僕らはあまり顔を出せないくらい。久しぶりに出席したら、平林さんの「名誉会員」の披露

である。

そうだ 従妹に：

たけやま溪子

東京大空襲後 富山の集団疎開から

鎌倉の縁故疎遠に切りかえた夏だった

「けいちゃん」の呼び声に駆けつけると

八才年上の従姉が井戸端で笑っている

「ほら アイスクリームだよ」蒸かした薩摩芋の上部を円錐形に剥いて

冷たい井戸水をかけたもの

「わー すごい」とむしゃぶりついたっけ

終戦が近づいていた頃のワンショット

覚えているかな そうだ従姉に手紙しよう



たけやま溪子

1933年 東京 大森生まれ  
1990年第20回神奈川新聞文芸コンクール 現代詩人選他  
詩集『かえりやんせ』『どくだみ』  
『あの日は雨が降っていたか』他  
所属・横浜詩人会、日本詩人クラブ、神奈川詩の会、Aquaの会



たけやま溪子さんを偲んで

福井すみ代

たけやまさんは、私より二歳年長であったが、同時代を過ごした者として、よく話が通じ、親しく交際をさせていただきました。

詩作を十代の終わり頃から始められたとのことですが、結婚、育児、老母の看取りなどのため、長い中断のあと、ようやく自分の時間が持てるようになって詩作を本格的に再開されました。

年少の頃、私など及びもつかない苦勞をされたとのことですが、それを乗り越え、厳しい体験をかてとして成長されました。そしてよき伴侶に恵まれ、幸福な家庭をきづかれました。

彼女の詩は、年少時の体験が数多く取上げられ種々のことの苦しみ、悲しさ、怒り、喜びが表現されています。さらに感情を抑え、客観視してユーモアを

感じさせる作品もみられました。その個々の事柄が、たんなる個人的感慨に留まらず、戦中、戦後の混乱した社会状況の中で起こった、普遍性を持つことを記述した作品であると信じています。

最後に、「生きたい」という強い意志を持って、筆舌に尽くしがたい八時間に及ぶ口腔手術を耐えたにも拘らず、詩作はおるか、会話をさえ出来ずに、この世を去ったことに深い悲しみを感じております。



理事長より

□第6回理事会。9月19日(土)午後3時〜野毛地区センターにて ①第47回横浜詩人会賞授賞式について。授賞式のと、来日中のスペインの詩人の講演及び朗読の会を開く。進行は、授賞式、講演会、受賞記念パーティの順に。②神奈川新聞の連載、執筆者の選定、承認。③通信について。④会計より。⑤千葉県詩人会からの講師派遣要請について。(中上会長に出席をお願いする)その他。

□第7回理事会。12月5日(土)午後3時〜野毛地区センターにて ①今年度の諸行事の総括。現代詩公開セミナー、夏の朗読会、詩人会賞選考員、などについて、意見を交換。次年度に生かす。②会報について。(内容進行予定など) ③会計より。会費未納者の現状報告。賞の基金が今年度は12万円余りと、かなり実績が上がった。今後の賞の継続をいうことを考えると、賞金の減額を検討すべし、という

通信担当から

【横浜詩人会通信では 情報をお待ちしています】  
会員消息にて詩書、詩誌、イベント等活動の紹介を致します。掲載希望の方は、掲載希望と記して情報を油本理事長または担当・光富までお寄せください。郵便、メール等にて承ります。もし掲載漏れや遅延等あれば、再度ご連絡ください。

会員消息 順不同・敬称略

【詩書】

『川端進詩集』(土曜美術社出版販売)  
佐相恵一詩集『森の波音』(コールサク社)  
荒船健次詩集『夜の金木犀』(歩行社)

【会員編集・発行の詩誌】

「アル」52号 発行・西村富枝  
「獣」62号 編集・発行 新井知次  
「地下水」217号 発行・保高一夫  
編集・方喰あい子 関中子  
「セントラー座」11月号  
編集・大石規子

「二兎」6号  
編集・発行 水野るり子

「索通信」20号  
編集・発行 坂井信夫

「青い階段」108号 編集 森口祥子

発行 浅野章子  
「狼」27号 編集発行 光富郁壘

「COAL SACK」84号  
編集 佐相恵一

「アル」52号 編集 西村富枝

【会員の詩作品発表の詩誌】  
「いのちの籠」31号  
うめだけんさく 佐川亜紀



馬場晴世 梅津弘子 佐相憲一  
 奥津さちよ  
 「獣」62号 保高一夫  
 植木肖太郎 うめだけんさく  
 「山脈」第二次14号  
 今泉協子 桜井ささえ  
 「左庭」32号 伊藤悠子  
 「よこはま野火」69号 菅野眞砂  
 足田澄 森下久枝 馬場晴世  
 「PP」第3次5号(通算25号)  
 田村雅之 細野豊 方喰あい子  
 今泉協子  
 「るなりあ」35号 荻悦子  
 鈴木正枝  
 「地下水」217号 新井知次  
 鎮西貴信 新沢まや 林柚維  
 「セントラー座」111号 荒船健次  
 うめだけんさく  
 「竜骨」98号 奥津さちよ  
 小林妙子  
 「二兎」6号  
 徳広康代 絹川早苗 坂多榮子  
 「PO」159号 関中子  
 「青い階段」108号 荒船健次  
 小沢千恵 坂多瑩子 福井すみ代  
 「狼」27号 浅野言朗 荒船健次  
 梅津弘子 小桜ゆみこ 坂井信夫  
 坂多瑩子 佐相憲一 鈴木正枝  
 日野零  
 「COAL SACK」84号 洲史

木島章

「詩と思想」12月号 下川敬明

関中子 川崎芳枝

「花」64号 下川敬明 田村雅之

「北から来たん」46号 広瀬弓

「アル」52号 阿部はるみ

【イベント】

創立五十周年記念・ちば秋の詩祭  
 11月8日(日)午後1時開会 千葉市  
 生涯学習センター講演「詩の行方  
 を考える」 中上哲夫

詩劇「支倉ウリポル」12月13日  
 (日)午後2時 つぎじTASSギヤラ  
 リー若松屋 広瀬弓

【授賞】

第17回小野十三郎賞受賞  
 平林敏彦詩集『ツイゴイネルワイ  
 ゼンの水邊』(思潮社)

【転居】

中上哲夫

佐相憲一



【筆名変更】

小桜ゆみ↓小桜ゆみこ

【編集後記】

あけましておめでとうございま  
 す。本年もよろしくお願い致しま  
 す。皆様におかれまして、健や  
 かな一年でありますように。

\*

2015年度の横浜詩人会賞は、  
 草野理恵子さんが受賞されました。  
 おめでとうございます。

出席された会員・参加者の皆様  
 にシヨートスビーチの願いがあ  
 り、下段の写真は授賞式の記事で  
 は紹介しきれなかったものを一部  
 載せています。

左から会場内、ご挨拶の神奈川  
 新聞丸山孝文化部長、お祝いの言  
 葉の高木祐子土曜美術社出版販売  
 社長、紹介の「詩と思想」一色真  
 理編集長です。

草野さんの益々のご活躍を期待  
 しています。

【お願い】

\*会費、横浜詩人会基金等の振込  
 みはこちらの口座にお願いします。  
 \*郵便振替

0023010015574  
 ヨコハマシジンカイ

☆授賞式のお祝い・ご挨拶のお写真



授賞式会場

丸山文化部長

高木社長

一色編集長

詩人会創立 1958年10月25日  
 通信創刊 1961年2月10日  
 会員数 129名(1月1日)